

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 4 月 28 日現在

機関番号：11401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25381160

研究課題名(和文) 小学校の学年別・文種別指導文型の設定と指導方法の開発

研究課題名(英文) Setting up model Japanese sentence patterns on the basis of school years and sentence types and developing instructional methods of these patterns in Japanese elementary schools

研究代表者

成田 雅樹(Narita, Masaki)

秋田大学・教育文化学部・教授

研究者番号：50361217

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、小学生が作文を書く際に必要となる文型を教科書教材や小学生の作文から収集し、説明型(報告文など)、説得型(意見文など)、語り型(感想文や物語文など)の3類型ごとに、指導に適した学年や必要度の高い文種、題材、表現意図・言葉の使い方等と指導方法の重点を明らかにすることを目標とした。

これに対して、89種類・292文型を収集し、その初出学年を指導を開始する学年として設定した。また、3類型のいずれかだけに多い文型やいずれにも多い文型を明らかにし、使用頻度の高い文種、題材、表現意図・言葉の使い方等を整理した一覧表データをまとめた。さらに、小学校の授業実践を通して指導方法の重点を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：With an aim to clarifying what sentence patterns need to be focused on and when these patterns need to be taught in relation to sentence types, themes, intentions and ways of expressions, the present study collected sentence patterns from authorized Japanese textbooks and from essays written by Japanese elementary school students, which are considered useful when they write essays.

As a result of the collection, a total of 292 sentence patterns, which can be divided into 89 types, are listed up, and the study examined in which year these sentence patterns need to be introduced. The study also clarified the distribution of sentence patterns in the three patterns, and compiled a list of data on what sentence types, themes, intentions and ways of expressions appear frequently. On the basis of the compiled list and the teaching practice in elementary schools, the study suggested what needs to be focused on in teaching the sentence patterns.

研究分野：国語科教育学

キーワード：小学校作文指導 文種 指導文型 表現機能 表現意図 言葉の使い方 指導方法

### 1. 研究開始当初の背景

文章表現の記述段階に欠かせない文型の指導が乏しく、多くは語彙指導に限られていた。指導が見られても、入門期の基本文型の指導や、発表方法としての「話型」指導としてであり、児童の表現力や認識力に資する望ましい文型指導は、記述中の個々の児童に対する一回性の膝下指導として行われるのみであった。機会を捉えながら児童の発達段階や表現の要求に応じる文型指導はほとんど見当たらないという状況であった。

また、文型や文型指導についても、国語学や外国人の日本語学習者を対象とした研究及び指導の実績があるのみであった。国語教育の分野では、文型について、単文・重文・複文という主述の呼応構造の数や構造に着眼した立場や、先にも述べた基本文型のような、主語・述語の品詞による抽象度の高い数分類を問題にする立場ばかりで、表現性に関わる具体的な文型は研究の対象になっていなかった。

小学生を対象とする文型やその指導法に関する研究及び実践は、1960年代初頭に数例見られるのみであり、これ以降は見当たらない状況であった。

### 2. 研究の目的

上記の研究開始当初の背景に述べたように、小学生を対象とした指導文型の設定やその指導方法に関する研究は大変手薄な状況にある。そこで、近年の小学生の文型習得状況の調査研究や指導法研究の基礎資料を整えることを目的として研究に取り組むこととした。

具体的には小学校全学年について、指導すべき文型(「指導文型」と称する)を収集し、文型ごとに指導学年・使用文種・使用題材・使用頻度の高い言葉の使い方を定め、併せて指導法の重点を明らかにすることを目的とした。

### 3. 研究の方法

文型の収集に先立ち、あらゆる文種を、説明型・説得型・語り型の3類型に整理し、この類型ごとに文型を収集することにした。文章の類型や文種類別については、国内外に諸説見られる。本研究においては、小学校の学習指導に活用することを目的としていることに鑑み、アメリカ版全国学力・学習状況調査ともいえる、全米教育省のNAEP(National Assessment of Educational Progress)の作文(Writing)における類別を参照した。これは、Informative-type(説明型)・Persuasive-type(説得型)・Narrative-type(語り型)の3つである。たとえば、具体的な文種である、記録文、報告文、記事文などは説明型であり、意見文、小論文、評論文などは説得型であり、物語などのフィクションや私信、読書感想文、生活感想文などのノンフィクションは語り型に含むものとする。

のである。

資料としたのは、小学校国語教科書(平成17年度版及び平成23年度版の光村図書、東京書籍、教育出版)や児童作文(研究代表者がかつて指導した小学校1・4・5・6年生のもの)である。教科書は作文単元に紹介されている児童作文例だけでなく、いわゆる説明的文章教材の本文や学習のてびき部分も資料とした。児童作文はほとんどが生活文であった。

収集した文型は、表現意図や表現機能によって整理し、機能番号・文型番号で識別した。表現意図や機能を決定する際には、『教師と学習者のための日本語文型辞典』(グループ・ジャマシイ編著1998くろしお出版)や『日本語表現・文型事典』(小池清治・小林賢次・細川英雄・山口佳也編2002朝倉書店)などの文献を参照した。

さらに、収集資料の中の初出学年を以て文型ごとに指導を開始する学年とした。また出現頻度を以て使用の必要度とし、各文型を使用すべき文種、題材、言葉の使い方を明らかにした。この段階では、『基本文型による書くことの指導』(菅井建吉著1972明治図書)や『書き言葉の文型 - 「文・連文」理解のための研究 - 』(1961京都市教育研究所)、『小学校・国語科 指導用文型百二十五種 - 表現の意図に関する文型 - 』(1960神戸市立教育研究所)などを参照した。

以上の資料や研究成果を踏まえて授業実践を行い、文型指導上の留意点を明らかにした。授業実践に当たっては、当時秋田大学教育文化学部附属小学校教諭の中村玉緒氏の協力を得て、平成26年度秋田大学教育文化学部附属小学校公開研究協議会の公開授業を通して検証した。

### 4. 研究成果

前項の記載と重複するが、結論として研究の目的を概ね達成した。すなわち、89機能、292文型を収集し、文型ごとの指導開始学年と使用文種、使用題材、言葉の使い方をまとめた一覧表データを作成した。

加えて、附属小学校国語部教員の協力を得て、授業実践を通して研究成果を活用し、指導上の留意点を整理することができた。

この成果は、例えば小学校国語教科書の作文教材に活用されうる。また、作文のみならず、スピーチ等の音声言語指導にも活用できる。

具体的には、研究初年度に文型の1次抽出と2次抽出を実施した。1次抽出は文型抽出の手がかりを得るために、児童作文(語り型・生活文)や東京書籍の平成23年度版小学校国語教科書の説明的文章教材(説明型・説得型)から文種を限定せずに広く行った。2次抽出は1次抽出した文型を、平成17年版小学校国語教科書(全6社)の説明的文章教材コーパスの検索機能を利用して検索した。すなわち説明型と説得型の文種から文型の

抽出をおこなったことになる。なお、1次抽出した文型は、53機能・169文型であった。2次抽出した文型は、19機能・35文型であった。例示すると以下の通りである。1年生の指導文型は、機能番号25「原因・理由」の文型番号75「だから～」、文型番号80「(わけは)～からです。」、文型番号84「～(だ)から～」、2年生の指導文型は、機能番号22「仮定条件」の文型番号67「～だったら～」、文型番号68「～たら～」、文型番号72「～なら～」、機能番号23「確定条件」の文型番号73「～たら～た。」、3年生の指導文型は、機能番号25「原因・理由」の文型番号77「なぜかという～からです。」、文型番号78「なぜなら～からです。」、文型番号79「なぜなら～のです。」、機能番号38「範囲・限定」の文型番号132「～まで～」、機能番号39「期限」の文型番号140「～まで(に)～」。

この結果は、平成26年3月発行の『学芸国語国文学』第46号(東京学芸大学国語国文学会)に掲載した。

研究2年目は、「語り型」の文種について文型の収集と学年設定を行った。資料としたのは、光村図書、東京書籍、教育出版の平成23年度版小学校国語教科書であり、生活作文教材の児童作文、話すこと・聞くこと教材の生活叙述部分、読むこと教材の学習のてびきにある感想や話し合いの記述から文型抽出を行った。収集した文型は、機能別・教科書別・学年別に整理し、機能番号と文型番号は前年度と同じにした。平成26年度に収集した文例(同一文型を含む使用例)は、光村図書から187、東京書籍から141、教育出版から177、合計505であった。前年度と同じ機能・文型のものもあり、逆に新規に収集したものもあった。これらについて、新規機能の新規文型、既存機能の新規文型、既存機能の既存文型に分けて、資料の初出を基にした学年設定を行った。

以上については、平成27年3月発行の『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』第37号(秋田大学教育文化学部附属教育実践研究支援センター)に掲載した。

研究最終年度は、平成26年度に扱った「語り型」の文種の文型(平成25年度に収集した「説明型」「説得型」と共通する文型と「語り型」として新規に収集した文型)について、使用文種・題材、使用する表現意図の検討を行った。文種の3類型について、ほぼすべての文型の使用頻度の高い文種・題材・言葉の使い方を改めて整理した。対象とした機能は89、文型は292に上った。研究のまとめとしてこれらを一覧表に整理し、主な文型についてその指導上の留意点をまとめた。

以上については、平成28年3月発行の『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』第38号(秋田大学教育文化学部附属教育実践研究支援センター)に掲載した。

さらに、掲載論文の紙幅の制限のためには認められなかった小学校2年生に対する検証実践の指導案、教材研究資料、授業記録、授業後の考察は、研究成果報告冊子(80部作成)に収載した。

検証実践から得られた指導上の留意点の例としては、第1に、単発の実践ではいけないことが挙げられる。協力してくださった中村教諭は、指導内容に文型を取り上げる作文指導の前に、約1ヶ月にわたって文型に触れる経験を導入した。具体的には、文型を「言い回し」という学習用語(児童にも理解しやすい用語)として提示し、学級で継続している「日記」の紹介の折に、紹介された児童の日記の中に見られる文例ごと収集し、教室壁面に短冊にして掲示した。こうして、多くの児童が使い慣れない文型を共有しながら蓄積する段階を経て、文型指導を含む作文学習へ進めるという手立てを講じていた。「はじめに文型ありき」になって、書く内容が文型にあわせて後から用意されるという本末転倒を防ぐ効果的な工夫である。

また第2には、上記のような児童による文型の収集・共有の過程で、学習用語が発案されたことである。具体的には、「ぎゃくのことになる(逆説)」、「こうしたら、そうなる(仮定条件)」、「並べる(並列)」、「つよめる(強調)」など、31種類に上った。

指導過程としては、奥津敬一郎氏の英語文型指導の段階案である、MM(ミミクリー&メモライゼーション・模倣と記憶) PP(パターンプラクティス・型練習) CC(コントロールカンパセーション・条件作文)が標準であり、中村実践においても、「言い回し」の収集時がMMとPPの機会となり、公開研究協議会における授業がCCの機会になっていた。

今後は研究を発展させ、収集する文型を増やすこと、機能や文型の類別を再検討すること、文型番号の振りなおしをすること等を行うことにより、教科書教材作成や授業にいつそう役立つ資料となるであろう。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

成田雅樹、小学校学年別「作文指導文型」に関する研究(3) 機能・文型ごとの使用文種・表現意図の検討、秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要、査読なし、第38号、2016、pp13-25

成田雅樹、小学校学年別「作文指導文型」に関する研究(2) 「語り型」の文種に用いる文型の抽出と学年設定、秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要、査読なし、第37号、2015、pp13-24

成田雅樹、小学校学年別「作文指導文型」に関する研究(1) 説明型・説得型の文種

に用いる文型の抽出と学年設定、学芸国語  
国文学、査読なし、第46号、2014、p  
p65 - 74

〔学会発表〕(計 件)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕  
出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

成田 雅樹(Narita Masaki)  
秋田大学・教育文化学部・教授  
研究者番号：50361217

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：